	くるす　さいとう　みずき　いしどら
氏　　名	CRUZ SAITO Mizuki Isidora
学位(専攻分野)	博　士（学術）
学位記番号	博甲第　４７３　号
学位授与の日付	平成 19 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科　機能科学専攻
学位論文題目	Specificity of the Japanese Spatial Structure through the Reinterpretation of Traditional Architectonic Elements (伝統的建築要素の再解釈を通して見た日本建築の空間構造に関する研究)
審査委員	(主査) 教授　日向　進 教授　森田孝夫 教授　石田潤一郎 准教授　西田雅嗣

論文内容の要旨

日本建築は、空間の認識と構造・構成における過去との強い連続性と、材料の脆弱さや建築の構法や様式の重層性に起因する場所やモノの不確実性という二つの基本的な相の下に成立する。それ故、日本建築の歴史的な研究は、西洋における建築史研究以上に込入った様相を呈し、独特の難しさを持つ。そうした難しさを理解し、本論文は、目的である日本における空間構造の表象形式の理論的分析に対する有効な方法として、日本人自身の伝統的な建築理解の観点である構法に着目し、構法に深く関わる二つの問題を取り上げる。一つは、住宅建築においても社寺建築においても、日本建築の空間構成の大きな特質を示していると考えられる「母屋／庇」による構造・空間構成、二つ目は、欧米の近代建築理論家に取り上げられモダニズム建築の理論形成にも関係した「畳」という建築要素、である。これらの分析・再解釈を通して日本建築の空間構造の特質の一端を明らかにしたのが本論文であり、これら二つの要素は基本的には極めて技術的な、すなわち構法的なものであるが、実はこうした構法の成立基盤や、その適用の実際に目を向ける時、こうした構法の成立や実利性を許容する文化的心性の中に、日本の空間構造の本質的な特異性の一端が垣間見られると言うのが本論文の主張である。

論文全体は、序論、母屋・庇を扱った章、畳を検討する章、結論の 4 章から構成される。

序論では、問題の所在や、上記方法論の妥当性・有効性を一般的な日本建築の性格の中に論じ、同時に西洋の研究者たちが呈する彼らの日本理解の中での日本の建築空間の一般的性格を論ずる。

「母屋・庇」を検討する第 1 章では、遺構の姿の中に、あるいは「間面記法」のような建築記述法の中に見られるこの「母屋・庇」の構造・空間構造が、古代に成立した後、民家、農家、寝殿造、中世密教本堂形式、書院造の中に様々な形で受け継がれ、西洋的日本建築観のエンブレムである「縁」にも関係し、日本建築の空間構造の中にいかに深く根を下ろしているかを示す。「間面記法」の誤解とその是正の歴史や、寝殿造りと書院造りの最近の研究成果に基づく空間把握の諸説を援用し、「母屋・庇」の空間思考を日本的空間構造の参照体系の表象として捉える。

第 2 章では、近代建築が「標準化」のモデルをそこに見た「畳」を取り上げる。日本人にとっても合理的な説明の難しい矛盾を有する畳という建築現象を、そうした矛盾の解消を可能にするより高次の考え方の模索を通して、「畳」に読取ることのできる日本の空間構造を検討し、その意味を模索する。

内法と芯々、京間と関東間、二間で一単位という考え方、部屋や畳の大きさを確定する実際の建設プロセス等を検討し、さらに日本の都市計画や木割法に触れ、建築や空間の認識における様々に重層する二重性 － 部分と全体、抽象性と具体性、実体性と仮想性、一般解と特殊解など － を日本の空間構造の特質として指摘する。

結論では、前二章が「母屋・庇」、「畳」という構法的な要素を通して明らかにしてくれたことの意味を考える。日本建築においては一見技術的である構法的な伝統的建築要素が、いかに「空間」を心性のレベルで構造化しているかを、技術としてだけではなく、集合的心性の中に明らかにし、西洋的な合理的な理屈の中に定位することを試みる。日本の伝統的空間の構成の階層性、形式の恒常性と原理の重層性に由来する空間表象の二重性を本論分は結論として導く。

論文審査の結果の要旨

未だに文化論として欧米人が語る日本家屋や日本建築の空間は、神秘的で曖昧なものとして語られることがある。また現代の日本建築家たちも、日本の建築空間を欧米の合理性とは別種の、世界にも類を見ない独特の精神性に支えられた美学の表象として語る。日本の建築空間に対するこうした見かたは、建築ならば必然的に持たざるを得ない「建造」というハードな側面とは見事に対極にある態度である。しかしながら、現代の建築家たちを別にするなら、今に至るまで日本の建築史家たちの興味の中心は技術的な側面であり、合理的説明であり、構法や一般構造、材料や詳細について多くを語る。美学的内容を有する「建築論」という理論書を建築家が著す伝統のあるヨーロッパとは異なり、日本では中世以来、建築を実際に建てることに直接に関わる世界の人間は、「建築論」を著さなかったし、彼らが著したのは専ら現場で使用するための技術の手引書、ひな形書であり、建築のハードな側面に特化していた。果たして上述のような欧米人の日本建築空間観は、エキゾティシズムの姿を借りた欧米人の願望の日本建築への投影であり、現代日本の建築家たちの言説は、そうした願望を察知した上での欧米人への無意識のサーヴィスなのであって、日本の建築畑の人間たちは、日本の建築空間を古来より技術的な側面を通して捉えてきた。ならば、日本建築の空間を語るに際して、技術的なハードな面から、構法的な現象を考察対象として、そこからもう一度日本建築の空間を考えてみることも許されよう。そして、こうしたアプローチも結局は、神秘的で曖昧な世界へと続くのかを確かめてみることも必要であろう。

以上は論文自体と博士論文公聴会での申請者の発表、及び質疑応答から知り得る本論文の研究の動機である。日本の建築空間の欧米との違いをことさらにあげつらい、同じようなものが両者にあるときには目をつぶるというのではなく、欧米からの関心と願望と欧米の合理的方法論を持ちつつ、日本人の日本建築との接しかたの実際にまで立ち入り、そこから再度、必要に応じて欧米の理論・考え方と日本の理論・考え方を適宜使い分ける姿勢は一貫しており、近年の比較文化論、比較建築論型の研究の実際に照らして、対象の把握において優れたものがあることが理解される。また日本が欧米との関係を持つ以前の純粋な歴史だけが興味の対象ではなく、加えて現・近代建築へも目配せのある論文である点も評価できる本論文の特徴である

具体的には「母屋・庇」と「畳」が空間構造を表象する構法的要素として詳細に検討される。表題にある「空間構造」と言うテーマと「畳」という面的要素の表面的ななじみの悪さや、歴史

的日本建築の理解に起因する若干の不正確な記述、あるいは多少主観的な判断等はあるものの、何れも立論、論旨、結論を左右するほどの大きな欠点ではなく、むしろ、特に「畳」を扱った章に顕著なように、我々日本人には気がつくことの非常に困難な矛盾点や不可思議な点の発見、そしてそれらを技術や歴史の世界に分け入って具体的に検討を行くことを通じて得た解釈を評価すべきであり、そうした結果、我々にとっても十分魅力的で新しい見解の提示も行われている。結論に示された日本の伝統的空間構造の二つの特質—二重性と階層性—は、本論が初めて指摘すると言う訳ではないが、「母屋・庇」、「畳」の非常に詳細な技術レベルでの検討を経てからの結論は説得力に富むものであり、結論の内容自体も妥当なものであり、比較建築文化論としての一定の価値を認め得る。